

2025年1月の総評に代えて 高橋修宏

ジェンダーの境界に置く寒卵

田崎森太（東京都）

何より、「ジェンダー」と「寒卵」の取合せが面白い。また、「境界に置く」と記されることで、寒卵に託した作者の批評的な眼差しも感じさせる。

円周率のつづく無限よ惜しみなく
ピアスホールに静寂が満ちて

辻村陽翔（北海道）

二行目、「ピアスホール」をめぐる繊細な把握が美しい。無限につづく「円周率」と、どこか呼応するような静謐な時間、そして透明な空間感覚に満たされた作品。

月光が廊下を照らすボストンの
地下鉄の自販機の痛み止め

azusa（京都府）

一行目、そして二行目「地下鉄の自販機」までは、静寂に包まれた都市風景の描写。だが、結句に「痛み止め」と記されることで、にわかに作中主体の状況が浮かびあがる。長回しのカメラアイで捉えたような作品。

靴紐のゆるみをそっと感知して
信号はまだ赤を続けた

小宮 颯人（東京都）

現実には、「靴紐のゆるみ」と「信号」に何ら関係など無いように見える。しかし、その両者に、ある関係＝照応を見いだすことこそ、詩の始まりがあるのかもしれない。

泣いていたせいで主題のわからない
映画はすばらしく透明で

雲理そら（大阪府）

たしかに、映画の主題なるものが掴みがたくても、いつまでも印象に残っている映画がある。映像のもう直接性と呼ぶべきかもしれないが、「泣いていた」、そして「すばらしく透明で」という作者の印象は、その映画自体の可能性の中心に届いているのではなかろうか。

空が剥がれるように降る雪の日に
わたしが母を産む夢を見る

常田 瑛子（山口県）

二行目、「母を産む夢」が鮮烈だ。一行目の「空が剥がれるように降る雪」という措辞とも、どこか響きあっている。われわれが生まれて、始めて出会う「母」という他者への愛惜、さらには葛藤などもうかがわせる作品だ。

雪だるま溶けて子どもの一人減る

檜野 美果子（宮城県）

どこか、怖い一句。雪だるまが、子どもだったのか。子どもが、雪だるまに变成了のか。俳句のような短い詩型ゆえに、その謎は、謎のまま深まる。

歩幅が大きいから春かもしれない

さほ（神奈川県）

もしや、春の訪れなど季節の変化は、まず身体が感受するのかもしれない。「歩幅が大きい」という自らの変化に、身体的なリアリティが宿る。

神話を地球に置いてって
星座は墓地の呼称になった

工藤 志与（青森県）

何よりも、発想がユニーク。星座にまつわる「神話」と「墓地」との対比によって、星座それ自体を主体としたイマジネールで特異な作品。

窓の外が明るいのは

お前の家が燃えているからだ

むしまる（大阪府）

一行目から二行目、その飛躍に注目した。すでに、われわれにとって、さまざまな災厄が隣り合わせであることを示唆する警句のような一作。

耳たぶを欠いた少年少女らは

こわれた虹のように笑った

高遠みかみ（大阪府）

なぜ、少年少女たちは「耳たぶを欠いて」いるのか。その理由は、何も記されていない。しかし、いまだ収束しない世界各地の戦乱を背景に読むと、「こわれた虹のよう」な笑いには、深い喪失と哀しみがただよう。

また戦争らしいと

馬が泣いて来る

広瀬 心二郎（埼玉県）

かつて馬は、軍馬などと呼ばれ「戦争」に使役されてきた。ピカソの〈ゲルニカ〉の中央にも瀕死の馬が描かれている。「戦争」の犠牲となるのは、何も人間ばかりではない。

「馬が泣いて来る」ことも御構いなしに、また愚かにも人間は戦争をつづけている。